

戦前戦後を省みて

福井県 森川 弘

戦後六十年、夢のように過ぎ去った。

全国軍人軍属恩給資格者福井県東連の山田会長より軍隊にて最も苦しかったこと、また悲しかったことを思うがままに書いてくれないかとの要請で不安ながらも引き受けました。

戦友はほとんど亡くなり、また生きておる方々も記憶がうすらぎ思い出せない。私も多少の記録はあったのですが、探しても見当たらない。思い出しながら書きますので多少の間違いがあると思います。お許し下さい。

確か昭和六（一九三一）年、満州事変となり、そして拡大してさらに支那事変へと泥沼化して行きました。鯖江の歩兵第三十六連隊の脇坂部隊が南京の光華門一番乗りのニュースが報ぜられ、連日のように連戦連勝のニュースに湧いた時代でし

た。昭和十六年七月一日、私に臨時召集令が下り、鯖江歩兵第三十六連隊に入隊を命ぜられました。私は第二補充兵であるため、三カ月間の初年兵訓練でした。

入隊し、練兵場に整列し、連隊長より「日本は今、大変な時である。お前たちは厳しい教練を身に着け、立派な兵になり国家に尽くしてくれ」との訓辞があった。そして田中中隊の第三班に配属された。班付上等兵を含めて十二人である。「森川、お前を軽機関銃の射手に任命する」と班長から言われた。その説明によると、十一年式軽機は大変重い、チェコ式軽機銃は軽く取扱いが楽であるとのことであった。そして「軽機班は中隊の花形である。よって上官の言うことを習得し、お前も自分なりに勉強し、立派な射手になれ」との訓辞があった。思えば思うほど大変だなと思った。

そしていよいよ初年兵訓練の始まりである。朝六時起床、点呼、班内の掃除、飯上げ、朝食は食器に汁をぶっかけ丸のみである。食器・食缶洗い

に炊事場へ行くと、炊事場の当番兵が「まだ汚れておる。洗い直し」という。ガラガラのおどろき顔でまるで赤鬼のような古年兵である。「洗い直しました」というとよく見もせず「もうよい、早く行け」という。

班に戻り古年兵の靴磨きを終え、練兵場に整列。軽機兵が集合して早速、軽機の操作の手ほどきを受ける。そうしている中、昼食の時間で早速食べる。昼休みは多少時間がある。飯台前に座り、たばこを一服する。あゝおいしい、一時の幸である。お昼の休みも終わり、午後の訓練の始まりである。

「貴様、何をしている。何度言ったら分かるんだ」「ハイ」パシーとビンタがとぶ。また向こうでは「貴様たるんでおる」と蹴飛ばされる。そうこうしている中、一日の訓練が終わり、兵舎に戻り晩飯をすませ、兵器の手入れをし「新兵さんよまた寝て泣くのかよ」との就寝ラップを聞きながら床に入る。

入隊して一カ月余りが過ぎ、気力も体力もへト

へトで、限界である。まだあと二カ月足らずある。体力が持つかと思ひ、うとうとしておると、カツと長靴の音、週番将校の巡察である。銃の点検でカチンと音がする。しまった誰かが銃の装填落しを忘れた。

全員起床、ベットの前に整列、一八〇センチもあるような将校が仁王立ちになり、「貴様ら、良く聞け。お前達は一銭五厘のはがきで、いくらでも集められる。兵器は国民の税金で造られる大変高価な物である。その兵器を休ませず、お前達だけ休んで良いのか。この馬鹿者。上等兵の初年兵訓練がなっておらん。たるんでおる」と言い捨てて出て行った。それからが大変である。

「装填落しを忘れた初年兵、前へ出る」「貴様、良くも俺に恥をかかせたな。股を開け、歯を食いしばれ」とスリッパで三発、みるみる顔が変形し紫色になり、その場で倒れてしまった。「誰か水を持ってこい」で洗面器の水をぶっかける。ようやく気が付き立ち上がる。目はうつろ、顔全体がは

れてぶつぶつである。

「さてお前達にも責任がある。股を開け、歯を食いしばれ」でスリッパで二発、顔から火が出るよう。「全員早く寝よ。今夜のことは他言無用、分かたな」

「ハイ」で一同床に入る。顔が痛いと言うより、熱い涙がポロポロ出てなかなか眠れない。

将校の暴言、上等兵の暴力、こんな教育のやり方で果たして心身共に充実した日本兵が出来るのだろうか。いつの間にか眠ってしまった。そして起床ラッパで起され、再び目まぐるしい一日の始まりである。

そして入隊以来二カ月過ぎたころ朝礼で班長より

「お前達よく頑張った。よって最後の仕上げに完全軍装で、鯖江より福井まで約十五キロを、軍事行軍を実施する」との命令である。まだ九月中旬、残暑厳しい時期である。当日が来た。朝七時出発、十五分もすると背中に汗がたらたら伝わる。皆顔

採り入れた稲を足踏みの脱穀機に掛け、その粗を選別機にかけ選別する。手回しの糶摺りで玄米にする。家の中は仏壇の中、箆筒の中までほこりが入って後始末が大変である。昔からいわれているように「米一粒に八十八回の手数がかかる」と、全くその通りである。

毎日毎日が冬支度で大変である。十二月になり八日の朝、何げなくラジオのスイッチを入れると臨時ニュースです。

「本日未明、日本海軍航空隊がハワイの真珠湾を空襲し、敵の艦艇多数を轟沈せしめたり。よって日本と米国は戦争状態に入れり」と。大変なことになった。長い支那事変で国力が弱体化しており、その中でアメリカのような大国を相手に戦を始めてどうなるかと、日本の悲劇の始まりである。

ヨーロッパではドイツとイタリアがイギリスとフランスを相手に戦を始めている。まさしく世界大戦である。日本も一億火の玉、在郷軍人により

も真赤である。麻生津の郵便局の前の広場で一時間の大休止である。福井の県庁前に十二時頃到着した。全員無事到着、行軍が終わった。

そうこうしてる間に三カ月が過ぎ、昭和十六年十月一日に召集解除になり、苦しかったこと、悲しかったこと、でもチョッピリ楽しいこともあり、わずか三カ月であるが、男として大任を果たし得た喜びもあった。いろいろな思い出を残しながら兵舎を後にした。母が作って祝ってくれた。「ご苦労さん無事勤めを終えた。おめでとう」と言ってくれた。

支那事変もますます泥沼化していた。それに米国との関係も非常に悪化し大変なことである。田の稲も黄金色に実り、稲刈りも目前に迫った農繁期である。農作業の内容も今とは格段の相違である。一株一株手で刈り採り、刈り採った稲は背負って運ぶ。そうして「はさば」に掛け乾燥させ、乾くと「はさば」から降ろして家に運ぶ。座敷も居間も稲で一杯である。

軍人教練、国防婦人会、学徒出陣、衣料品、食料品ほかあらゆる生活用品が配給制になり、国民の日常生活が苦しくなっていた。そうした中、毎日毎日連戦連勝を報じ、国民は大本営の発表を信じ、有頂天になっていた時代である。そうした中私にもいつ召集されるか、またいつ召集されてもおかしくない。

私の父は四十八歳の若さで他界し、私は一人っ子で母と二人暮らしである。召集がくれば母に淋しい思いをさせると思い、結婚することを決意し母に相談した。母も大変喜んでくれ、昭和十九年四月七日に結婚した。その頃日本の状況は一変し、連戦連敗であった。ますます国内状況も悪化し軍部は「一億総火の玉になれ」と懸命の宣伝をした。そうした中、運命の時が来た。昭和十九年七月十五日朝何げなく外を見ると電報配達の人がやって来る。来たな「森川さんお迎えが来ましたよ」と覚悟はしていたが背筋がぞつとした。

通知書には「明日の午後五時、敦賀の粟野連隊

に入隊」と記してあった。全く慌ただしい一日である。一人の生か死か分からない門出である。せめて二晩位の余裕が欲しいと思った。「やはり一銭五厘」。

一夜明けて織田駅で沢山の人の万歳に送られ目的地へ向かった。母や妻や親類の者が沢山、敦賀まで送ってくれた。母は青い顔をして涙をポロポロ出していた。妻は顔を真赤にして顔中涙で一杯であった。本人は気持ちがいきり立っておる故か悲しくない。むしろ男として名誉のことだ。早く戦地に行き、敵を倒し国のために尽くさねばならないと、死に対して余り恐くない、今思うと不思議な心境である。

無事入隊をすませ、一夜が明けた九時頃何か騒々しい。何事かなと思っていると新婚の夫婦が逃亡したようだ。可哀想に、この二人の人生は終わったと思った。その後のことは知る由もなかった。

入隊して五日過ぎた頃、母、妻、親類が大勢面かった。このため船団は丸裸となる。門司を出発して十三日目の朝、敵の潜水艦の魚雷が「照国丸」の横を通り抜けて行った。それから間もなく三百メートル程離れた輸送船に魚雷が命中、船は真中から折れ大爆発を起した。小さく見えるのは兵、大きく見えるのは馬、自動車類である。十分間程の出来事である。そして船もろとも海底に沈んでいった。全員が甲板に出て合掌し冥福を祈った。日本の飛行機が現場の上空より花束を落とし、翼を二、三回振って立ち去った。何とも言えぬ思いである。

門司を出航して一カ月余り、ようやく台湾の高雄港に入港した。久し振りの陸地である。高雄は良港で入り口は狭いが中は広く、港には日本の艦船でいっぱいである。上官の話では現地出発までしばらく日数があるらしい。兵舎に入り夕食となる。白米、味噌汁、肉にさつま芋、久し振りの御馳走である。夕食後風呂に入る。一カ月振りの風呂で生まれ変わったようである。それに何よりの

会に来てくれる。おいしい物を持って来てくれた。本当に楽しい一時であった。

入隊して十日目の午後六時頃「今夜十時、現地向かって出発する」との命令である。完全軍装し敦賀駅を出発した。十二時三十分頃京都に到着。民家にて一泊、翌日も通過して門司港に到着、輸送船「照国丸」一万トン級に乗船し軍団が分かった。鎧兵団混成旅団、旅団長陸軍少将田島彦太郎、兵員ははつきりしないが千五百人から千八百人位らしい。一隻の船に兵員、兵器、食糧、馬、自動車等を積み込み、私達の居間は畳四枚に八人。銃や背のう、その他種々の持ち物がある。船内は蒸し風呂のようなものである。夜になると兵達は甲板に出て休む。食事は玄米にお菜は肉が少々入った芋類で誠にお粗末な食事である。当時は制空・制海権共に敵の手中にある。

昼は行動出来ない。敵の潜水艦がうろろうしている。門司を出航する時の輸送船は六隻であった。また護衛艦が二隻だったが十日間位しか護衛しな

ことは、古参兵の目が光っていない、そして一夜が明け兵器の手入れ、洗濯、身の回りを整理する。

今日は自由行動で散髪に行く。市内のデパートでは驚いたことに沢山の商品がある。先づ母や妻に砂糖、バナナ等々を送る。店員に内地に送っても着くかと聞くと航空便で送るゆえ九〇パーセント着くとのこと。早速送った。私も少し食い物を買って兵舎に戻った。

一時間もすると「今夜十時、目的地に敵前上陸する。全員準備せよ」との通達である。その夜は月が満月、南方の夜影は誠にすばらしい。小さな上陸用舟艇に十人程乗り、快速であるので一時間十分ほどで目的地に到着、上陸地は台湾とフィリピンの中間に点在するバタン列島のバスコである。昭和十九年九月十五日将兵五百人位である。

そこで命令が出た「森川、お前は旅団本部付である。護衛隊長の当番兵を命ず」と。護衛隊長は陸軍少尉後藤氏である。

バスコは列島の中心にあり、元知事公舎を旅団

本部とし、その隣が護衛隊長の宿舎である。その晩、隊長より当番兵の心得と、いろいろの任務を言われた。

「森川、お前は軍歴がわずか四カ月位で護衛隊長の当番兵とは成績が優秀だったんだ」と初めて褒められた。

島にはほとんど島民はいない。日本兵の上陸を知り、逃げたらしい。島の産物は少しの陸稲と芋類であり、家畜は水牛、豚、鶏等である。

毎日毎日当番兵の任務である。一日三回の飯上げ、掃除、洗濯、隊長の書類の整理、一日中多忙である。隊長は大変きさくな方で、近い時期に米国軍の敵前上陸があるかも知れないという。本部の兵隊たちは山に設営の準備をしている。

その翌日、敵の空襲があった。島には空襲の防備が何もない。兵隊たちは「たこつぼ」に飛び込んで敵機の去るのを待つばかりである。二十分程で敵機は去った。戦死が十人ほど、負傷者は五十人余り、軍医も衛生兵もいるのだが重傷者の手当

そうした中、八月六日頃、隊長が司令部から呼び出しがあり、急いで行かれた。

二時間程して帰られ「森川、日本が敗けた」と言われ頭を抱えてしまった。「お前らはすぐ日本へ帰れるぞ。旅団長以下幹部はどうなるかわからない。長い間ご苦労であった」と涙ぐんで肩をポンポンと叩かれた。私もポロポロと涙が出た。何にも例えようもない気持ちであった。

三日程して米兵が上陸して全員武装解除、そして船でマニラ港に入る。旅団長、副官、隊長、その他軍の幹部は一人もおらなかつた。マニラに上陸して何より驚いたことは広場にドラムカンに入つたガソリンが山のように野積されていた。日本でガソリンは血の一滴と言われていた。それに弾薬も野積みである。あゝこれでは敗けるはずだ。いままでも命がけの苦労が何だったのか、空しさが込み上げてくる。戦友も頭をかかえ座り込んでうつろな目をして遠くを見つめている。あゝ皆も同じことを思っているのだなと思つた。

が出来ない。「あゝ辛い、痛い」「何とかしてくれ」と叫びながら死亡した兵が沢山おつた。

陸揚げされた食糧も底をつき、日々食糧事情は厳しくなつて来た。島民もそれを知つてか、水牛も豚も鶏もどこへ隠したのか見当らない。本国からは何の補給もない。

毎日毎日、水平線を通る艦船や航空機はすべて敵ばかりである。十二月十日頃、隊長が夜八時頃帰つてこられた。「俺は本部で会食があり食べて来た。お前まだだろう俺のを食べよ、遠慮するな」という。一杯入っているらしい誠の上機嫌である。「こんなこと大きな声では言えないが日本は敗けたね」と、独り言のように言い捨ててごろり寝てしまった。その寝顔には苦痛の様子が伺えた。

昭和十九年も終わり、明けて昭和二十年一月一日、正月である。でも島には酒もない門松も雑煮も何もない。内地のことを思い出しながら、元旦は過ぎた。

米軍の上陸におびえながら毎日が過ぎて行つた。

捕虜の幕舎に案内され、広さに驚いた。二千人入れるそうである。周りには鉄条網が張りめぐらされていた。中は暗く外は外灯で昼のようである。外にはフィリピン兵が銃をかまえて中を見張っている。幕舎生活は朝六時起床、アルミカップ、日本の大きな茶碗と同じ大きさで、濃いぞうすいを立つたまま食べ、トラックで作業場へ。弾薬を海に捨てる作業である。

昼は固い食パン、一口食べては水を飲む。パンが胃の中で膨張し、それを何回も繰り返す。味はない。少々塩が入っているようである。晩はカップに米飯である。おかずはコンビーフなどである。私のような一六〇センチの身長に一八〇センチ位の軍服。靴は二六センチの大きさに二九センチ位の服もだぶだぶ靴もぶかぶか、帽子は頭がすっぽり入り、顔が半分ほどしか見えない。軍服には大きく「PW」と黄色のペンキで書いてある。タオル、歯磨き、石鹸等いろいろな生活用品が支給された。夕方になると南方特有のスクールが来る。飛び

出して体を洗う。水浴である。幕舎には二千人ほどおり混成旅団ゆえ日本各地からの寄せ集めである。いろいろな職種がおり、医者、芸人、小説家、教員、大工など書き上げたら限らない。幕舎生活早や五カ月になる。まだ復員命令が出ない。長い夜が「退屈」である。突然広場に仮設舞台が出来た。演芸をやるらしい。

ところが私に女役になってくれとのこと、そして毎晩練習である。主役に選ばれ、演題は「一円に泣く妹」。どこから集めたのか、布からメーキャップ用品、大道具、小道具まさしく驚きである。

「泣くな妹よ、妹よ泣くな」を主題とした演芸である。

当日が来た。演芸の始まり、大当りで拍手喝采、一夜にしてスターである。貴重な飯を、また石鹼等を持つてくる。たしか一週間ごとに演芸が行われた。その度に拍手喝采、今思うに背筋がゾーッとする。

そうこうする中、昭和二十一年の正月を迎えた。

田の稲は全部刈り採られ、また「はさば稲」もほとんど残っていない。部落へ近づくと「ブンブン」と足踏みの脱穀機の音があちらこちらから聞こえて来る。我が家の前で窓からのぞくと妻と姉が脱穀していた。戸を開けて「ただいま」と声を掛けると妻は驚いた顔をして、裏の畑にいた父と母に大きな声で「弘が帰って来た」と叫んだ。母は私に飛びついて「幽霊」ではないかと手足を触り「嬉しい、嬉しい」と喜び、妻は地面にへばりついて泣いている。

家の中は稲で一杯で、座る場所もないほど。いろりの側に座り、井草の臭いを嗅いで、これが日本臭いだと思う。風呂に入り、久し振りに「かいまき」に着替える。夕食は農繁期なので御馳走はないが白米、ねぎとじゃが芋の味噌汁、焼鯖、漬物など本当に美味しかった。

妻の話によると、高雄から送った砂糖類は到着し、親類や近所へ分けて大変喜ばれたとのこと。話に花が咲き、母が「十二時だ、また明日も忙し

正月には珍しく餅が出た。正月も終わり平常に戻り、また毎日作業である。その頃誰が言ったか「近い内に復員命令がでるらしい」と。皆が飛び上がって喜んだ。しかしその後、何の音さたもなく数カ月が過ぎ、十月五日頃、米軍の司令部より通達である。

十月十日、召集解除の通達があり、マニラ港を出港する。召集されてから二年一カ月程である。はつきり記憶がないが、たしか元の日本兵服が支給されたと思う。給料も八百円程度支給されて大金だと思った。

いよいよ出港の時が来た。十月二十五日出港、名古屋港に十月三十一日入港、名古屋駅より汽車にて一路故郷の福井へ、福井駅に到着して外へ出て驚いたのは市街は一面焼野原、内地も大変だったんだ。福井よりバスで約一時間、故郷の山田停留所に着き、目に入ったのは馴染の「くらが岳」、そして家、小川、田んぼ等前と何も変わっていない。「あゝ国敗れて山河あり」全くその通りである。

い。もう寝よう」と床についた。久振りの寝床が懐かしい。

一夜明け、敗戦国日本はこれからどうなるのか。家には食料品、衣料品等生活用品は不足しており、その中、国民の英知と努力で一歩一歩復興に取り組み、日一日と復興を行っていった。

私も福井で覚えた商売を活用して、県道沿いに呉服店を開業し、順調に売上げを伸ばして、長男、長女、次女と三人の子供に恵まれ、三人共国立大を卒業し、長男は福井銀行の取締役を、長女、次女は小学校教師を勤めている。また孫が八人おり、私が八十五歳、妻が八十歳、いまのところ健康に暮している。これも神仏のご加護で、社会の恩、家族の恩に感謝しながら生活をさせてもらっています。

【解説】

体験記執筆者は、昭和十六年七月一日、臨時召集令により、鯖江歩兵第三十六連隊に入隊を命ぜ

られる。第二補充兵で、三カ月間の初年兵訓練である。

部隊には地方色、郷土色に加え、それを發揮する強兵がある。一般的に精強な部隊の産地であることと並行して厳しい内務班の扱しきとも言える訓練・鍛練がある。鯖江の歩兵第三十六連隊も御多分に洩れず、つとに支那事変における南京の光華門一番乗りの脇坂部隊として有名であり、体験者は内務班の実情を記録している。

入隊以来二カ月、初年兵教育の最後の仕上げに、完全軍装で、鯖江より福井まで約十五キロの強行軍がある。これらをこなして三カ月が過ぎた昭和十六年十月一日に召集解除になる。

昭和十九年七月十五日、今度は召集である。「明日の午後五時、敦賀の栗野連隊に入隊」と全く慌ただししい入隊である。そして十日目の午後六時頃「今夜十時、現地に向かって出発する」との命令である。

完全軍装し敦賀駅を出発、ここで独混第六十一

旅団砲兵隊、旅団工兵隊、旅団通信隊

バスコは、パタン列島の中心にあり、元知事公舎を旅団本部とし、その隣が護衛隊長の宿舎でした。執筆者は護衛隊長の当番兵となる。島にはほとんど島民はいない。島の産物は陸稻と芋類が少しで、当番兵の任務は一日三回の飯上げ、掃除、洗濯、隊長の書類の整理でした。米軍の敵前上陸も予想され防備の設営の準備をしているが、空襲があっても島には防備がなく、蝟壺に飛び込んで敵機の去るのを待つほかに死傷者も出る。陸揚げされた食糧も底をつき、何の補給もない。

戦闘は、この空襲程度であった。終戦まで約一年の軍隊生活を南の島で体験する。米兵が上陸して全員武装解除、そしてマニラで捕虜収容所に収容される。

鯖江は歩兵第三十六連隊のあった町で、現在は「三六町」として町名が残っている。

旅団（鎧一〇二九一部隊）旅団長・陸軍少将田島彦太郎、と分かる。兵員は千八百人位、兵員、兵器、食糧、馬、自動車等を積み込み、当時は制空・制海権共に敵の手中にある中を門司を出航して一カ月余り、台湾の高雄港に入港する。出発までしばらく日数がある。

ここから小さな上陸用舟艇に十人程乗り、一時間三十分ほどで目的地に到着、上陸地は台湾とフィリピンの中間に点在するパタン列島のパプヤン島のバスコである。昭和十九年九月十五日、将兵五百人位である。

独混第六十一旅団は南方軍―第十方面軍の戦闘序列にあり、京都編成部隊で、パプヤン海の諸島に配備された。

所属部隊編成は、

旅団司令部：鎧第一〇二九一部隊

独立歩兵第三〇二大隊・独立歩兵第四〇五大

隊・独立歩兵第四〇七大隊・独立歩兵第四〇

八大隊・独立歩兵第四〇九大隊

悲運の航空部隊バレット峠で散華

岐阜県 和田 昇

私の生家は農業で父母、祖母に男四人、女五人の十二人家族の大世帯でした。

昭和十八（一九四三）年一月、満州チチハルの独立飛行第五十三中隊に赴任、その後第四飛行師団司令部に転属、昭和十九年五月「大陸令」により所属する第四飛行師団は第四航空軍の戦闘序列に編入され、フィリピンのマニラに進駐しました。

昭和二十年一月、師団は軍命令により司令部戦闘司令部をエチアゲに、主力はソラノ付近に転進、航空作戦の任務を遂行していました。そして一月九日、米軍はリングエン湾に上陸、ルソン各地で激しい戦闘が繰り返され、戦況は悪化の一途をたどっていました。

第四飛行師団は連日の戦闘で多くの飛行機を無くし、出撃可能な残存飛行機全機を特攻機に投入